千葉県教育振興財団調査報告第709集

市原市南名山遺跡

― 県道上高根北袖線　県単交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

平成25年３月

千 葉 県 市 原 土 木 事 務 所

公益財団法人　千葉県教育振興財団

市原市南名山遺跡

いちはらしななやまいせき

— 県道上高根北袖線　県単交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してまいりました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第709集として、千葉県市原土木事務所の県道上高根北袖線の県単交通安全対策事業に伴って実施した市原市南名山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の方形周溝状遺構や中～近世の道路状遺構が見つかるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導・御協力を頂きました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理　事　長　　渡　邉　清　秋

凡　　例

1　本書は、千葉県市原土木事務所による県道上高根北袖線　県単交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県市原市上高根 1607-105 ほかに所在する南名山遺跡（遺跡コード 219-097）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県市原土木事務所の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業は、調査研究部長 関口達彦、調査２課長 橋本勝雄の指導のもと、主任上席文化財主事 山田貴久が下記の期間に実施した。

　　発掘調査　平成 24 年 10 月 9 日～平成 24 年 10 月 29 日

　　整理作業　平成 24 年 11 月 1 日～平成 24 年 11 月 30 日

5　本書の執筆は、山田が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県市原土木事務所、市原市教育委員会ほか、多くの機関、多くの方々から御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、以下のとおりである。

　　第１図　国土地理院発行 1/50,000 数値地図「姉崎」「木更津」を 1/75,000 に縮小して使用

　　第２図　市原市発行 1/2,500 地形図を 1/400 に拡大して使用

　　第３図　地図史料編纂会編 明治前期 関東平野地誌図集成 1/25,000「姉崎」「上総横田」

　　第４図　国土地理院発行 1/25,000 数値地図「姉崎」「上総横田」

　　第８図　市原市発行 1/2,500 地形図を縮小し、同 1/5,000 地形図と合成して使用

8　遺跡周辺の航空写真（図版１）は、京葉測量株式会社が平成 20 年２月１日に撮影した 2008C-C35-19 を約 1/9,000 に拡大して使用した。

9　本書で使用した座標は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北を示す。

＊本書の執筆に際し、以下の文献を参考にした。

大谷弘幸 1994「西上総地域の古道跡－いわゆる鎌倉街道を中心として－」
『研究連絡誌 第 41 号』（財）千葉県文化財センター

加納　実 2000「60 南原遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古１（旧石器・縄文時代）』千葉県 県史シリーズ９

（財）市原市文化財センター 1987『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター調査報告書 第 20 集

（財）市原市文化財センター 1995『市原市中高根南名山遺跡』（財）市原市文化財センター調査報告書 第 57 集

（財）市原市文化財センター 1998『市原市中高根南名山遺跡（第２次）』（財）市原市文化財センター調査報告書 第 62 集

須田　勉 1998「27 萩ノ原遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古３（奈良・平安時代）』千葉県 県史シリーズ 11

武田宗久・金子浩昌 1966「千葉県市原郡上高根貝塚」『日本考古学年報 14（昭和 36 年度）』誠文堂新光社

田村　勇 1999「20 道しるべ」『千葉県の歴史 別編 民俗１（総論）』千葉県 県史シリーズ 34

千葉県教育委員会 1999『千葉県埋蔵文化財分布地図（３）－千葉市・市原市・長生地区（改訂版）－』

千葉県教育委員会 2000『千葉県埋蔵文化財分布地図（４）－君津・夷隅・安房地区（改訂版）－』

豊巻幸正 1998「48 東郷台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古３（奈良・平安時代）』千葉県 県史シリーズ 11

永野ヨシ子ほか 1981「旧戸田村地区内遺跡旧址分布図」『南総郷土文化研究会誌第 12 号』南総郷土文化研究会

吉村光敏・白井　豊 1991「道しるべからみた近世の交通圏－上総・下総地方の道しるべを例として－」
『研究報告－人文科学－第１巻 第３号』千葉県立中央博物館

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１．調査に至る経緯…… 1
　　２．調査の経過と方法…… 2
　第２節　遺跡の位置と環境…… 4
　　１．遺跡の位置と地形…… 4
　　２．周辺の主な遺跡…… 4
　　３．南名山遺跡の調査歴…… 6
第２章　検出した遺構と遺物…… 8
　第１節　遺構…… 8
　第２節　遺物……10
第３章　まとめ……12
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　県道上高根北袖線…… 1
第２図　調査範囲・遺構の分布
　　・グリッドの配置・基本層序…… 3
第３図　南名山遺跡周辺の地形…… 5
第４図　南名山遺跡と周辺の主な遺跡…… 7
第５図　ＳＳ００１・ＳＤ００３…… 9
第６図　縄文土器・石器……10
第７図　ＳＤ００１・ＳＤ００２……11
第８図　南名山遺跡全測図……13
第９図　道標に刻まれた地名……14

表目次

表１　南名山遺跡調査歴…… 6
表２　方形周溝状遺構計測値……12

図版目次

図版１　遺跡周辺の航空写真
図版２　調査前遠景・近景
図版３　調査状況・土層堆積状況
図版４　ＳＳ００１
図版５　ＳＤ００３
図版６　ＳＤ００１
図版７　ＳＤ００２
図版８　出土遺物・道標

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１．調査に至る経緯（第１図）

一般県道上高根北袖線（以下、「上高根北袖線」と表記）は、市原市と袖ケ浦市を結ぶ県道である。その起点は、市原市上高根地先にある一般県道南総昭和線との交差点にあり、途中、同市天羽田地先で主要地方道千葉鴨川線と合流して館山自動車道・姉崎袖ケ浦インターチェンジを経由後、袖ケ浦市久保田台宿入会地先で再び分かれて国道 16 号･北袖インターチェンジに至り、袖ケ浦市北袖地先において終点となる。路線の総延長は約 12.7 ㎞を測る。

市原市では、昭和 50 年代後半頃より、市域中～南部におけるゴルフ場の増加や都市化の進行に伴って、道路の狭小化が目立つようになってきた。上高根北袖線の起点から中高根十字路までの区間は、当時、市原市道 6018 号線と呼ばれ、市原市土木部道路建設課の管理下にあったが、この路線でも拡幅を伴う道路の改良工事が計画された。計画路線内には周知の遺跡である南名山遺跡が所在することから、工事に先行して財団法人市原市文化財センターによって発掘調査が実施された。昭和 62 年度に第２地点から始まった発掘調査は、続く平成元年の第３地点から平成４年度の第４地点に至るまで、断続的に５年次にわたり６地点が調査された。その後、調査完了部分について道路改良工事が施工され、供用が開始されている。

平成８年、市道 6018 号線の上記区間は県道上高根北袖線となり、千葉県市原土木事務所の管理下に置かれた。路線の起点に近い今回の調査対象地は、先の調査の際、諸般の事情により発掘調査が実施できなかった部分であるが、今年度交通安全対策事業が計画されたため、関係諸機関による取扱いについての協議及び千葉県教育委員会による試掘調査を経て、発掘調査による記録保存の措置が取られることになった。

発掘調査は公益財団法人千葉県教育振興財団が実施することになり、千葉県市原土木事務所との間に委託契約が締結された。

第１図　県道上高根北袖線

２．調査の経過と方法（第２図、図版２・３）

発掘調査は、平成 24 年 10 月 9 日から上層確認調査を開始し、その成果に基づく上層本調査と下層確認調査を 10 月 29 日まで実施した。調査面積は、365㎡の対象面積に対して、上層確認調査 152 ㎡、上層本調査 97㎡、下層確認調査 18㎡であり、延べ調査面積は 267㎡となった。調査終了後、人力及び重機による埋戻し作業を行い、調査対象地を調査前の状態に復した。

また、発掘調査に続き、11 月 30 日まで整理作業を行い、本報告書の刊行に至った。

発掘調査では、調査に先立って重機を用いた表土除去を行った。調査対象地は、調査前には西側に隣接する上高根北袖線とほぼ同じ高さで、見かけ上は平坦な地形を呈していたが、事前の試掘調査の結果から、平均 80㎝ほどの厚さに客土された山砂がほぼ全面に存在し、さらに盛土・旧表土を除去した後の遺構検出面は、現道から約 1.4 m下に当たるとされていた。そのため、作業の安全上、大型ダンプを含む車両の交通量が多い現道側にガードレールを設置するとともに、十分な法面等を確保して調査区を掘り下げることとした。また、ガードレール以外にも既設の道路標識や電柱、調査区を斜めに縦断するように埋設された上水道管等、多くの制約ある中での表土除去は慎重を極め、必然的に調査範囲も限られたものとなった。

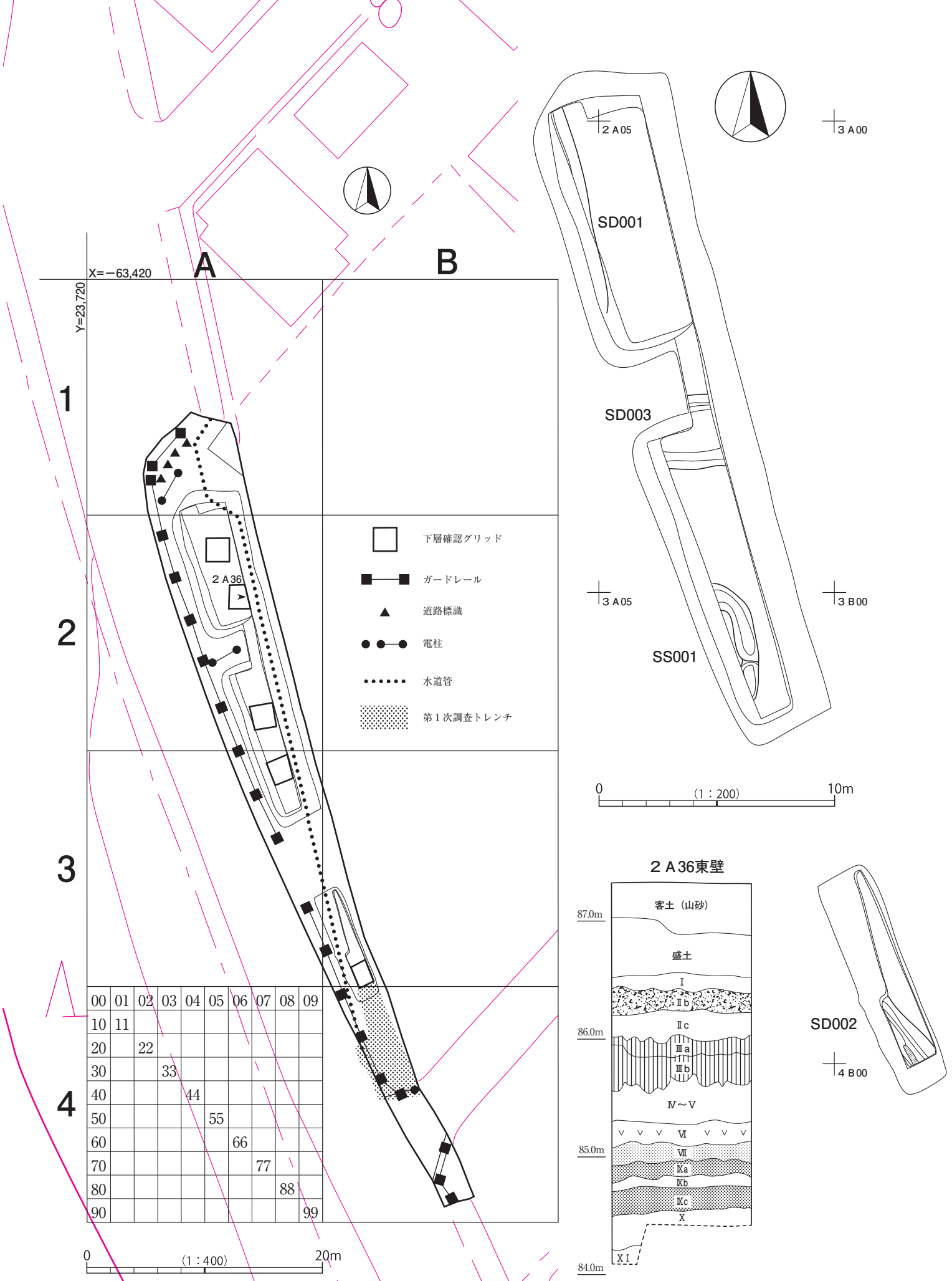
表土除去に続いて、調査対象地の基準点測量を行った。基準点測量は、多角測量、水準測量、方眼杭打測量からなり、調査範囲内に座標値と水準値を持った方眼杭を打設するものである。この方眼杭は、調査に付随する各種実測作業の際に必要となるもので、今回の調査では世界測地系（平面直角座標第Ⅸ系）に基づき、X = −63,420、Y = 23,720 を基点として、調査対象地全域を網羅するように 20 m × 20 m方眼の大グリッドを設定した。大グリッドの名称は、基点より南に向かって算用数字で１・２・３・４、東に向かってアルファベット大文字でＡ・Ｂとし、これを組み合わせて１Ａ、４Ｂ…とした。さらに、大グリッドを２m×２m方眼の小グリッドに 100 分割し、北西隅より東に向かって 00 ～ 09、南に向かって 00 ～ 90 と割り振り、たとえば２Ａ 05、３Ｂ 80…といった４桁の英数字で表されるものを小グリッドの名称とした。そして、各小グリッドの北西隅に当たる方眼杭にこの４桁の英数字を表記した。

発掘調査は、縄文時代以降を対象とした上層の確認調査から着手した。南北に細長い狭小な調査範囲をジョレン等を用いて少しずつ掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、調査範囲のほぼ中央で東西に横断する溝状遺構１条（SD003）と方形周溝状遺構１基（SS001）及び調査範囲の北端と南端で１条ずつ道路状遺構（SD001、SD002）を検出したため、引続き上層本調査に移行するとともに、旧石器時代を対象とした下層の確認調査を並行して開始した。下層の調査は、遺構が検出されなかった部分あるいは遺構の調査が終わった部分に５か所のグリッドを設定して精査したものの、遺物が全く出土しなかったため確認調査の段階で終了した。

なお、今回の調査では発掘作業・整理作業の各工程において記録のデジタル化に取り組んだ。

発掘作業では、当財団が平成 23 年度より順次導入を進めている遺構実測支援システム（株式会社ソキア・トプコン製 追尾式トータルステーション SRX5XS ＋株式会社ＣＵＢＩＣ製「遺構くん Cubic」）を使用して、各種の図化・記録作業を行った。実際に作成した図面は、調査対象範囲図をはじめとして、上層確認調査範囲図、個別の遺構平面図、下層グリッド配置図、遺物出土分布図等に及ぶ。また、調査に係る写真撮影についてはデジタルカメラでの記録と従来のフィルム写真での記録とを併行して行った。

整理作業では、出土遺物のデジタル写真撮影及び Adobe 社製の Illustrator、Photoshop、InDesign による編集作業を行った。



第２図　調査範囲・遺構の分布・グリッドの配置・基本層序

第２節　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と地形（第２～４図、図版１・２）

房総半島のほぼ中央にある市原市は、東京湾に面する工業都市である。県下一の面積を誇る市域は南北に非常に長く、北部と南部とではその景観に大きな差がある。すなわち、北部は東京湾に面する臨海工業地域であり、ＪＲ内房線沿線には住宅地が広がり、東京や千葉の衛星都市として発展してきた。一方、中部から南部にかけては房総丘陵に連なる山間地域で、里地里山風景の広がる農村地帯の景観がよく残ってはいるものの、その合間には数多くのゴルフ場が展開し、住宅地等のミニ開発による都市化の波も次第に広がりつつある。

南名山遺跡は、市域中部の養老川中流域左岸に広がる洪積台地上に位置し、姉崎段丘面と呼ばれる養老川の河岸段丘上に立地する。周辺は養老川の支流・三枝川と椎津川の支流・深城川、小櫃川の支流・松川の分水嶺に当たり、標高は 80 m～ 90 mを測る。

本遺跡は、市原市中高根字南名山から同市上高根字駒野にかけての約 900,000㎡を占める広大な遺跡範囲を有するが、今回は同市上高根 1607-105 ほかの 396㎡が調査対象地となった。調査範囲の中央北寄り、２Ａ 36 グリッドに設定した下層確認グリッドの東側壁面で、今回の調査における基本層序を観察すると、80㎝ほどの客土・盛土下に旧表土層と思われる腐植土層のⅠ層及びⅡb 層、ソフトローム層との漸移層であるⅡc 層が 50㎝～ 60㎝ほど堆積し、以下、立川ローム層が 1.8 mほどの層厚で堆積していることが判明した。立川ローム層の堆積状況は、これまで行われてきた本遺跡の他地点の層序とほぼ似ており、市原市中部地域における立川ローム層の一般的な堆積状況を示しているものと考えられる。

２．周辺の主な遺跡（第４・８図）

南名山遺跡周辺には、養老川流域の段丘面を中心に数多くの遺跡が所在している。過去に行われた本遺跡の別地点の成果も併せて、周辺の主な遺跡を概観したい。なお、各遺跡や本遺跡の別地点との方向及び距離は、今回の調査地点からの計測値である。

旧石器時代の遺跡では、本遺跡の第１次調査の際に、第２地点において立川ローム層第２黒色帯の下部（Ⅸ層）より剥片が１点と礫２点の出土が、第６地点において上層遺構中ではあるがナイフ形石器１点の出土が報告されている。また、第２次調査の際に、いずれも立川ローム層のⅢ層～Ⅳ層から、チャート、凝灰岩、安山岩等に礫を伴う遺物集中地点１か所とナイフ形石器１点を含む遺物の単独出土地点３か所が検出されている。第１次調査・第２地点及び第２次調査地点は北西に約 400 m～ 450 m、第１次調査・第６地点は南東に約 200 mを測る（第８図）。

縄文時代の遺跡では、北西約 700 mに南原遺跡（第４図６）がある。草創期に位置付けられる遺跡で、隆起線文土器を主体とした土器群と多数の有舌尖頭器を含む石器群が出土している。また、北約 1.6㎞には早期の竪穴住居跡及び炉穴が検出された外迎山遺跡（同図４）が、北北西約 2.4㎞には早期・条痕文土器を伴う炉穴 21 基が検出された立野遺跡群唐沢遺跡（同図２）がある。さらに、北北西約１㎞には中～後期の地点貝塚である堀込貝塚（同図５）が、東北東約 800 mには後期・堀之内式期を主体とする上高根貝塚（同図８）がある。上高根貝塚は、養老川流域最奥部に位置する大規模な点列貝塚として知られている。

古墳時代の遺跡では、南南東約 300 mに萩ノ原古墳（同図９）が存在する。現況では径 16 m、高さ２mを測る円墳である。また、北東約１㎞には前方後円墳２基、円墳 23 基、方墳１基からなる上野山古墳群（同図７）が所在する。

第3図　南名山遺跡周辺の地形

奈良・平安時代では、前述した外迎山遺跡（同図４）で方形周溝状遺構 28 基、火葬墓４基が検出され、北約 2.2㎞にある立野遺跡群山見塚遺跡（同図３）では方形周溝状遺構 11 基が確認されている。また、南西方向には寺あるいは仏教関連施設を含む集落跡の調査が行われた萩ノ原遺跡（萩ノ原廃寺・同図 10)、及び袖ケ浦市東郷台遺跡（川原井廃寺・同図 11）がある。８世紀第４四半期から９世紀末葉あるいは 10 世紀初頭に位置付けられる萩ノ原遺跡は、基壇建物跡２棟、掘立柱建物跡３棟以上、瓦塔基壇１基、竪穴住居跡 22 軒、製鉄関連遺構５か所等が検出され、鉄製品をはじめ青銅製品、瓦塔片や布目瓦及び墨書土器等が出土している。一方、８世紀第４四半期から９世紀後半に位置付けられる東郷台遺跡では、掘立柱建物跡６棟、竪穴住居跡８軒、溝状遺構７条、土坑及びピット多数が検出され、大量の瓦類をはじめ土師器・須恵器の坏類、灰釉陶器、鉄製品、瓦塔片等が出土している。

古代から中世にかけて、本遺跡周辺は鎌倉街道に関わる伝承が多く点在する。川原井字鎌倉通、中高根字大街道、立野字鎌倉街道を通る鎌倉街道は下新田・立野ルート（同図中）と呼ばれ、そのルート沿いの多くの遺跡で関連遺構が調査されている。また、下新田・立野ルートの中高根 1449-38 地先から分かれ、ほぼ直線的に南下する支道の存在が、部分的ではあるが、本遺跡の過去の調査で明らかにされている。

３．南名山遺跡の調査歴（第８図、表１）

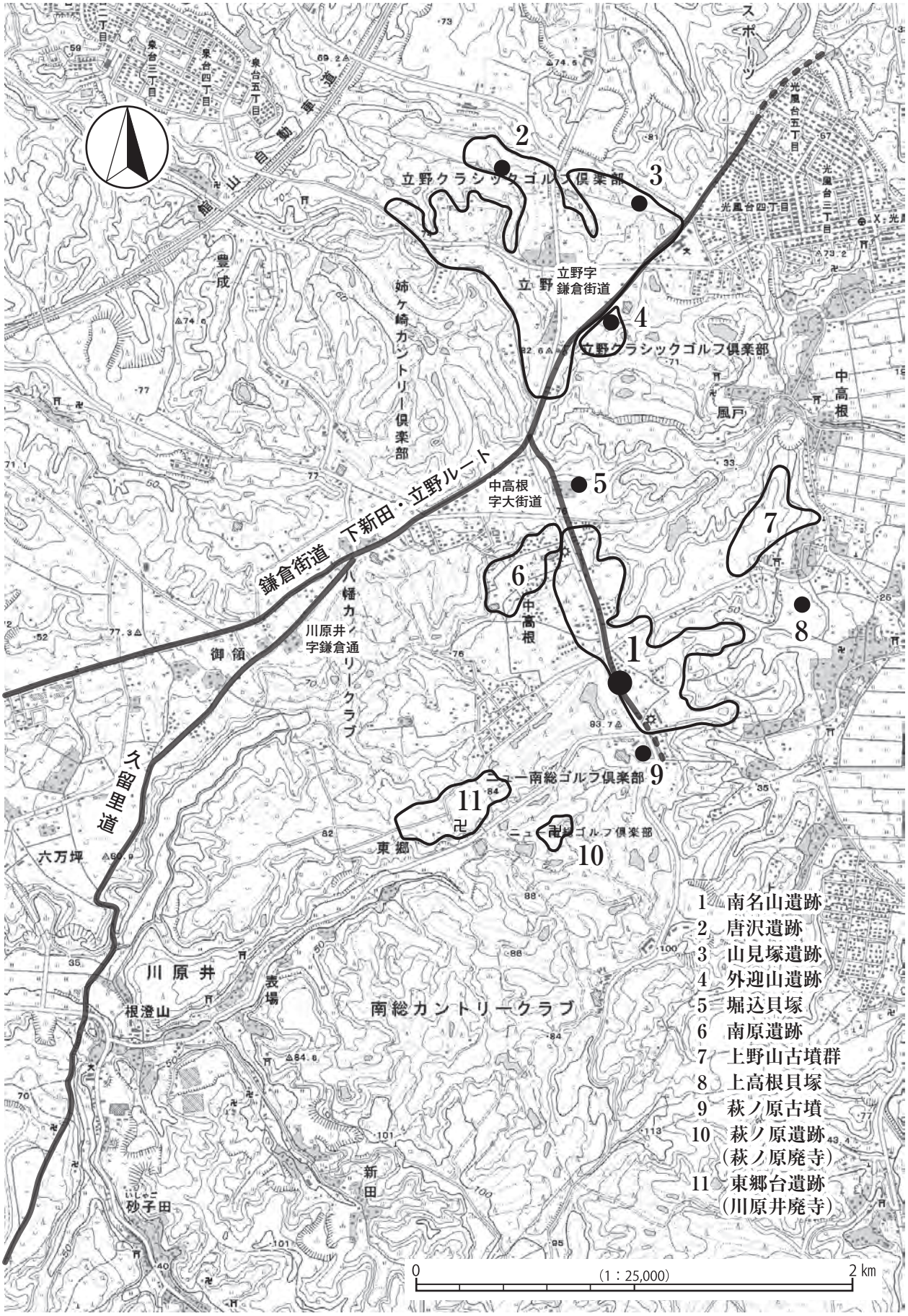
南名山遺跡は、大きく分けて過去に２回の発掘調査歴を持つ。いずれも財団法人市原市文化財センターによるものであり、今回の調査は第３次調査とも呼ぶことができる。

第１次調査は、前節で触れた通り、市道 6018 号線の道路改良工事に伴って５年次にわたり断続的に行われたもので、第１地点～第６地点に分かれ、広大な南名山遺跡をほぼ縦断する 6,533㎡を対象にしたものである。調査の結果、旧石器時代の遺物出土地点１か所（Ⅸ層)、縄文時代と思われる陥穴状遺構１基、奈良・平安時代の方形周溝状遺構３基のほか、土坑、道路状・溝状遺構等が検出されている。

第２次調査は、老人保険施設の建設に伴って平成９年に行われたもので、第１次調査・第２地点の東側に隣接する 13,000㎡を対象にしたものである。調査の結果、旧石器時代の遺物集中地点１か所・遺物出土地点３か所（いずれもⅢ層～Ⅳ層)、縄文時代早期の竪穴住居跡１軒･炉穴１基及び前期の竪穴住居跡１軒、奈良・平安時代の方形周溝状遺構１基、道路状遺構１条が検出されている。

表１　南名山遺跡調査歴

		調査年度	対象面積	上層		下層		成　　果
				確認調査面積	本調査面積	確認調査面積	本調査面積	
第１次調査	第２地点	S62	780 ㎡	70 ㎡	468 ㎡	20 ㎡	－	道路状遺構１条 遺物出土地点１か所（Ⅸ層）
	第３地点	H1	1,060 ㎡	110 ㎡	377 ㎡	12 ㎡	－	方形周溝状遺構２基 溝状遺構２条 土坑２基
	第６地点	H2	1,370 ㎡	137 ㎡	200 ㎡	－	－	方形周溝状遺構１基 道路状遺構 溝状遺構
	第１地点	H3	1,890 ㎡	189 ㎡	296 ㎡	－	－	道路状遺構４条 溝状遺構１条
	第５地点							縄文・陥穴１基 道路状遺構１条 溝状遺構　土坑
	第４地点	H4	1,433 ㎡	143 ㎡	－	8 ㎡	－	道路状遺構１条
第２次調査		H9	13,000 ㎡	1,300 ㎡	112 ㎡	130 ㎡	100 ㎡	縄文・住居跡２軒、炉穴１基 方形周溝状遺構１基 道路状遺構１条 遺物集中地点１か所（Ⅲ～Ⅳ層） 遺物出土地点３か所（Ⅲ～Ⅳ層）
合計			19,533 ㎡	1,949 ㎡	1,453 ㎡	170 ㎡	100 ㎡	延べ調査面積 3,672㎡



第４図　南名山遺跡と周辺の主な遺跡

第２章　検出した遺構と遺物

第１節　遺構

前章で述べたとおり、多くの制約ある限られた調査範囲ではあったものの、方形周溝状遺構１基、道路状遺構２条、溝状遺構１条が検出された。狭小な調査範囲のために、いずれの遺構も部分的な検出にとどまり、全容を精査できた遺構はない。また、いずれの遺構からも時期を明確に示す遺物は出土しなかった。

遺構の種類ごとに報告する。

SS001（第５図、図版４）

調査範囲の中央部南寄り、２Ａ97 グリッド～３Ａ28 グリッドにかけて検出された方形周溝状遺構である。検出されたのは方形周溝状遺構の東辺に当たる周溝部分で、南北方向に 5.2 ｍほどを精査した。

周溝の幅は検出面で 0.8 ｍ～ 1.0 ｍ、底面で 0.3 ｍ～ 0.4 ｍを測り、断面は深さ 15㎝の浅い皿状を呈する。南側ほぼ 1/3 の部分に、周溝が途切れるように底面がやや浅くなる部分がある。埋葬施設は、今回の調査範囲からは検出されなかった。主軸方向をＮ - ９° - Ｗと推定した。

調査範囲外に広がる本遺構を西側の調査区法面で観察したところ、検出面とした立川ローム層のⅡｃ層あるいはⅢ層上面よりもさらに上方に、周溝覆土及び周溝と思われるプランが延びていることが判明した。法面で捕捉した本遺構は、立川ローム層のⅡｂ層を切るように構築され、周溝の規模は周溝上端幅 2.25 ｍ、底面幅 1.8 ｍ、深さ 40㎝～ 50㎝を測り、周溝外縁幅 6.3 ｍ、方台部幅 1.8 ｍを測る方形周溝状遺構の存在を推測することができた。

遺物は、古墳時代のものと思われる土師器の小片が覆土中より４点出土したのみである。

SD003（第５図、図版５）

調査範囲の中央北寄り、２Ａ56 ～ 77 グリッドにかけて検出された。Ｎ -88° - Ｅとほぼ東西方向に延びる溝状遺構の約 2.7 ｍ分を精査した。覆土中を含めて硬化面が全く検出されなかったことから溝状遺構としたが、将来的に、範囲外に延びる東西両側部分の調査成果によっては種別を変更する必要性も有する。検出面での溝上端幅は 3.2 ｍ、底面幅 1.7 ｍを測り、比較的しっかりとした掘込みは、深さ 75㎝の逆台形状を呈する。壁は傾斜の屈曲点は持つものの、底面から検出面に向かって開きながら立ち上がる。壁面にも、平坦な底面にも施設等の痕跡は認められない。

東西両方向の調査範囲外に延びる本遺構の断面を図化した東側で観察したところ、検出面とした立川ローム層のⅢ層上面よりもさらに上方に覆土及びプランが延びていることが判明した。また、図化しなかった西側の調査区法面の観察からは、立川ローム層のⅡｂ層を切って構築され、溝上端最大幅 4.2 ｍ、深さ 90㎝の規模を持つものであることが判明した。

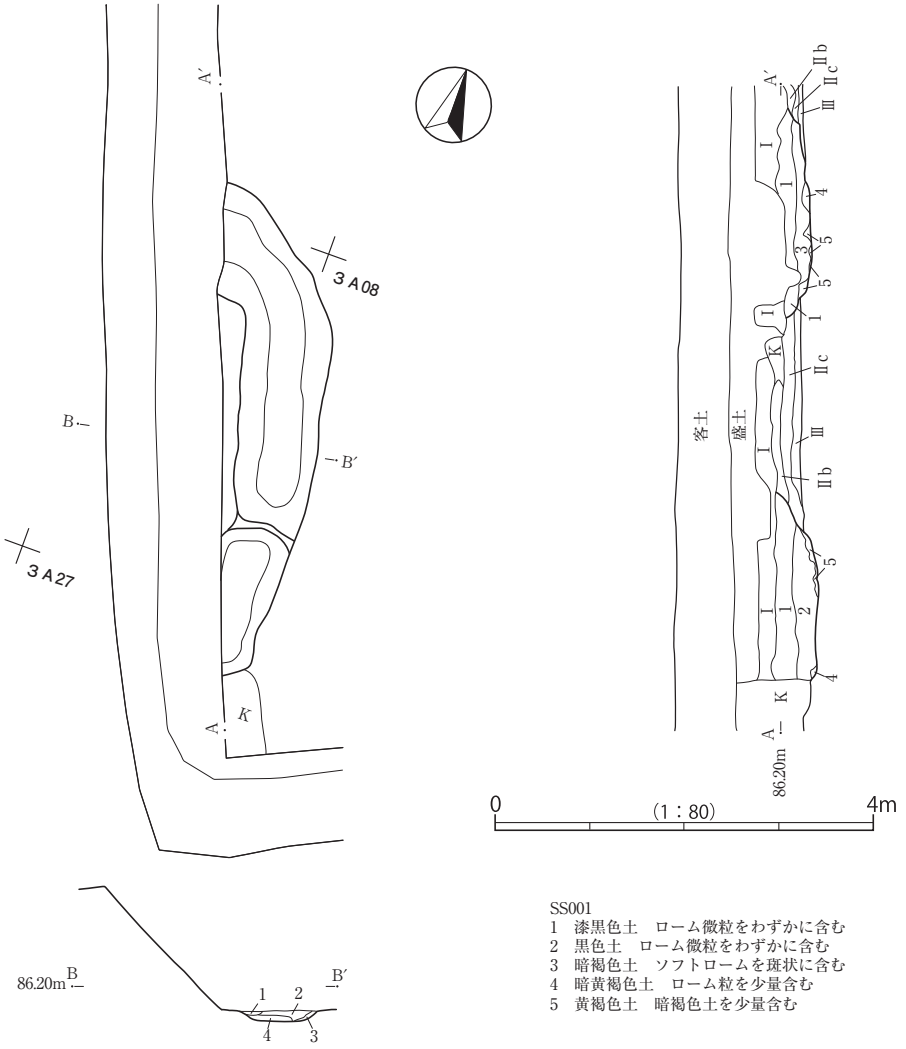
遺構の構築時期については、SS001 の覆土最上層で観察された特徴的な漆黒色土が、本遺構の覆土最上層にも観察されたことから、SS001 とほぼ同時期の可能性が推測できる。

遺物は、古墳時代のものと思われる土師器の小片が覆土中より 10 点出土したのみである。

SD001（第７図、図版６）

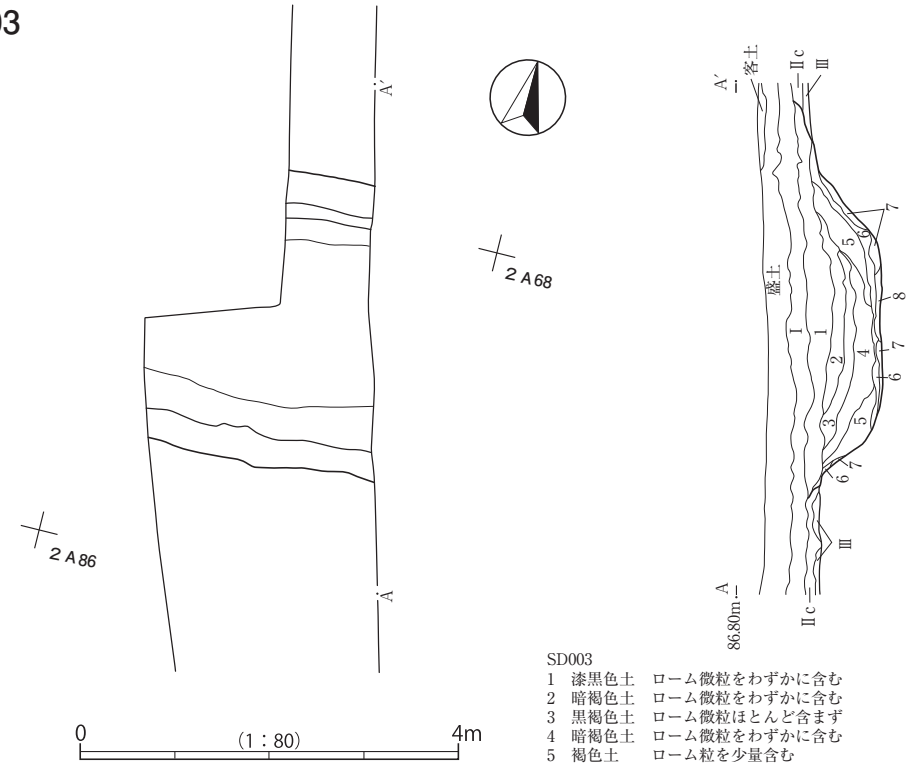
調査範囲の北端に近い１Ａ93 グリッド～２Ａ45 グリッドにかけて検出された。第１次調査第４地点の南端トレンチで検出された道路状遺構に続く方向を持ち、覆土中から硬化面が検出されたことから道路状

SS001



SS001
1　漆黒色土　ローム微粒をわずかに含む
2　黒色土　ローム微粒をわずかに含む
3　暗褐色土　ソフトロームを斑状に含む
4　暗黄褐色土　ローム粒を少量含む
5　黄褐色土　暗褐色土を少量含む

SD003



SD003
1　漆黒色土　ローム微粒をわずかに含む
2　暗褐色土　ローム微粒をわずかに含む
3　黒褐色土　ローム微粒ほとんど含まず
4　暗褐色土　ローム微粒をわずかに含む
5　褐色土　　ローム粒を少量含む
6　暗黄褐色土　黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土が斑状　ローム粒を少量含む
7　黄褐色土　暗褐色を少量含む
8　黄褐色土　ソフトローム･ハードローム混じる　しまりあまりなし

第5図　ＳＳ００１・ＳＤ００３

遺構と判断した。立川ローム層のⅢ層上面で、N -17° - Wの方向に 6.5 mほどが検出された。

南北に走る道路状遺構の東側の側壁の一部が精査できただけで、検出面での溝の上端幅、底面幅とも不明である。調査範囲北端から 2.7 mの部分まで検出された平坦面が底面とすると、検出面からの掘込み断面は深さ 35㎝の浅い皿状を呈する。

調査範囲外に広がる本遺構を西側の調査区法面及び北側断面で観察したところ、検出面とした立川ローム層のⅢ層上面よりもさらに上方に覆土及びプランが延びていることが判明した。法面・断面で捕捉した本遺構は立川ローム層のⅡｂ層を切るように構築され、規模は南北方向に約 2.3 m延びて長さ約 8.8 mまでが追跡でき、上端幅 1.5 m以上、深さ 90㎝以上の掘込みを持つことが判明した。

遺物は全く出土していない。

SD002（第７図、図版７）

調査範囲の南端、３Ｂ 80 グリッド～４Ｂ 01 グリッドにかけて検出され、底面付近から硬化面が検出されたことから道路状遺構とした。立川ローム層のⅢ層上面で、N -37° - Wの方向に 3.0 m分が検出された。第１次調査第５地点の各トレンチで検出された道路状遺構とは、微妙に異なる方向を持つ。

南北に走る道路状遺構の西側上端が調査範囲外にあるため不明な部分が多いが、検出面での上端幅は 1.4 m以上、底面幅 15㎝～ 70㎝を測り、部分的に踏みしめられた硬化面が存在する。検出面からの掘込み断面は深さ 35㎝の浅い皿状を呈する。

調査範囲外に延びる本遺構を南側の断面で観察したところ、検出面とした立川ローム層のⅢ層上面よりもさらに上方に覆土が堆積し、表土層直下より深さ 60㎝の掘込みを持つことが判明した。

遺物は、古墳時代のものと思われる土師器の小片が覆土中より 16 点出土したのみである。

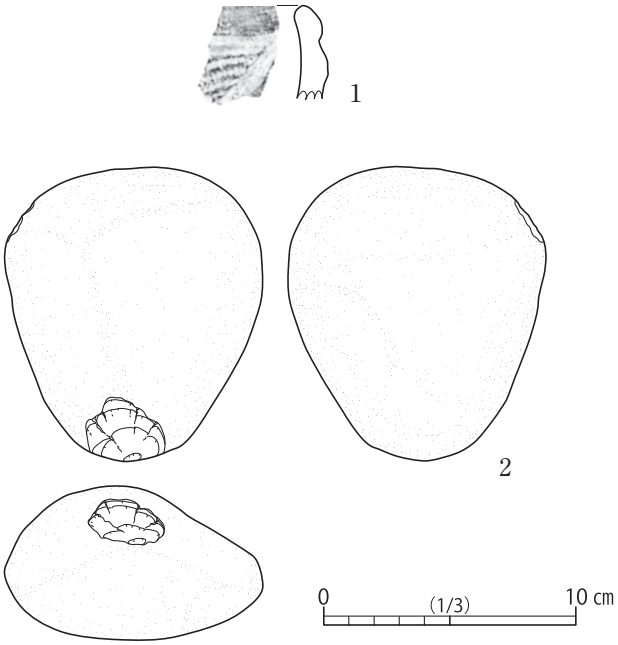
第２節　遺物（第６図、図版８）

縄文土器２点、縄文時代の礫石器１点、古墳時代の土師器 42 点が出土したすべての遺物である。狭小な調査面積に加え、方形周溝状遺構及び溝状・道路状遺構といった遺構の性格的にも、遺物の出土量は非常に少なく、土器はいずれも小片ばかりである。

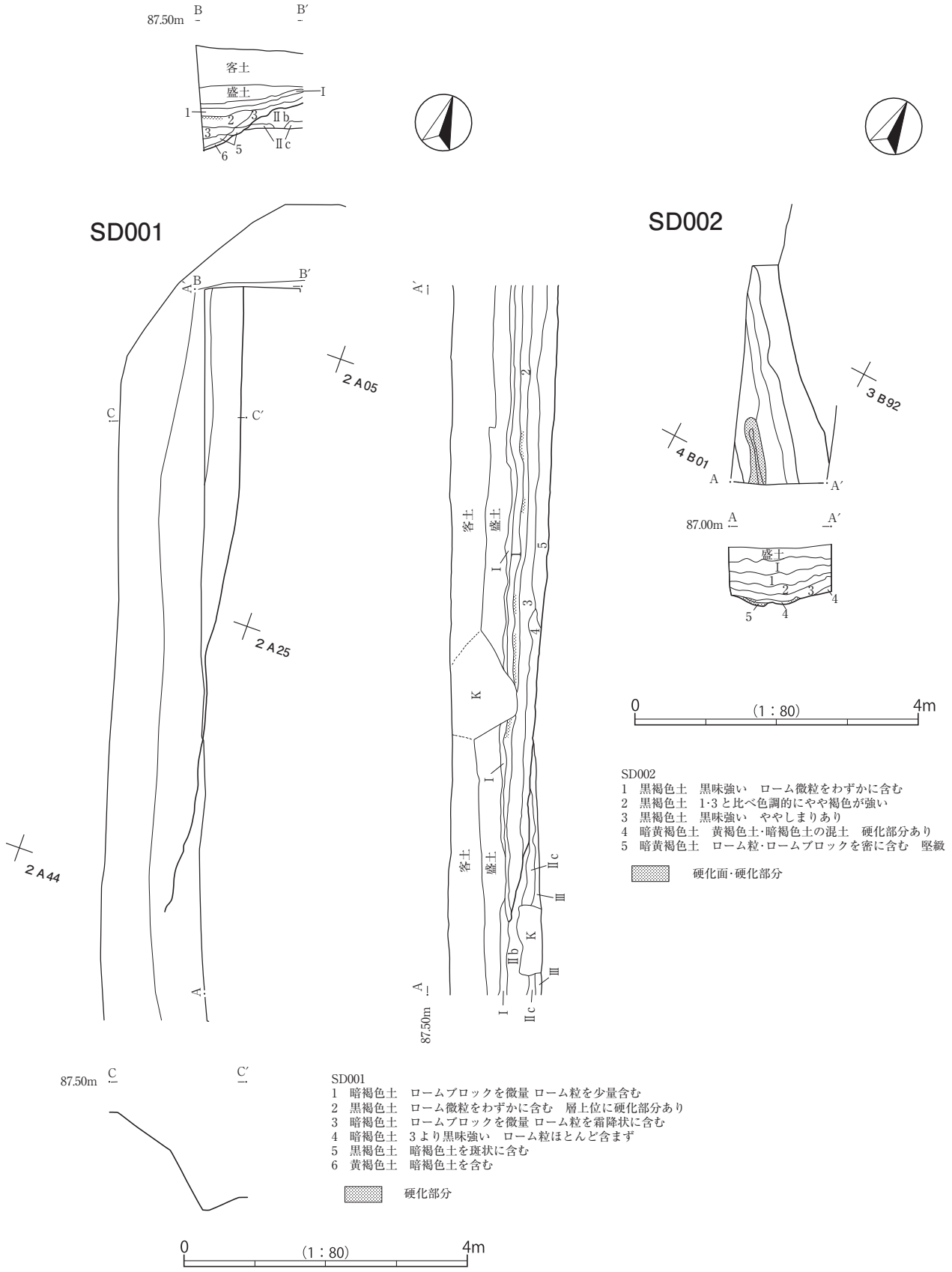
縄文土器は、２点のうち破片の大きな１点について図化した。１は沈線で描出された区画文を持つ口縁片で、中期・加曽利Ｅ式土器に比定される。図化していない他の１点は早期・条痕文土器の胴部片である。

２は表面に敲打痕を認める敲石である。長さ 11.68 ㎝、幅 10.24㎝、厚さ 6.11㎝、重量 937.8 ｇを測る。石材は石英斑岩である。SD003 を覆う客土内から出土したものだが、形状の特徴から縄文時代の遺物と判断した。

土師器には口縁部片が数点含まれてはいるものの、小片ばかりで口径を復元･図化できるものがないため、比較的大きな４点について写真を掲載した。３～５は坏類、６は鉢あるいは甕の口縁部片と思われる。



第６図　縄文土器・石器



第7図 ＳＤ００１・ＳＤ００２

第３章　まとめ

南名山遺跡の発掘調査は、昭和62年度及び平成元年度～平成４年度の第１次調査、平成９年度の第２次調査に続き、今回が３回目に当たる。今回は、多くの制約ある狭小な範囲の調査ではあったものの、方形周溝状遺構１基、溝状遺構１条、道路状遺構２条の各遺構を検出し、得られた成果は少なくない。

ここでは、過去２回の調査成果と併せ、今回検出した方形周溝状遺構と道路状遺構から南名山遺跡を概観したい。

１．方形周溝状遺構（第８図、表２）

調査範囲の中央南寄りで１基の方形周溝状遺構（SS001）を検出した。精査できたのは南北方向に5.2ｍほどの周溝東辺部分で、南東隅付近には途切れるように周溝が浅くなる部分が１か所検出された。また、西側の調査区法面の観察から、周溝は立川ローム層のⅡｂ層を切って構築され、周溝外縁幅6.3ｍ、方台部幅1.8ｍ、周溝上端幅2.25ｍを測ることが判明し、規模に対して周溝幅が太く、方台部の小さい方形周溝状遺構の存在が推測された。

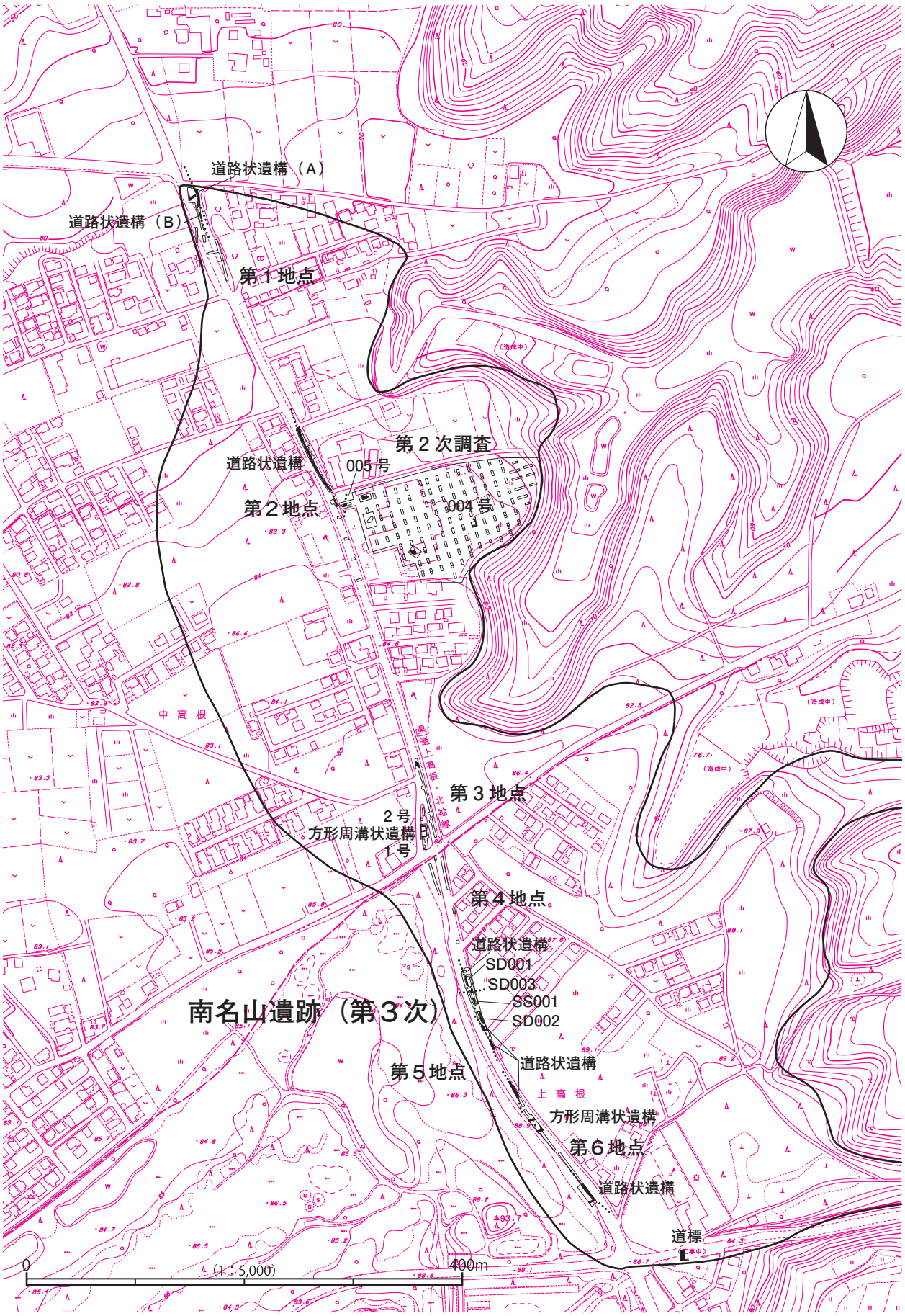
これまで南名山遺跡では、第１次調査・第３地点における一辺を共有する２基及び同第６地点における１基、第２次調査における１基の方形周溝状遺構の調査成果があり、今回の１基を加えた５基の方形周溝状遺構の集成を試みた。

比較すると、SS001は、位置的には第１次調査・第３地点の２基と第６地点の１基のほぼ中間地点に所在し、検出面での規模において第１次調査・第３地点の２基に近いものであること[(1)]、またSS001を含む５基すべての軸方位が、N -6°～19° - Wと座標北からいくぶん西に振れる範囲に収まることが判明した。なお、構築時期を見ると、SS001以外の４基は主体部あるいは周溝内から出土した土器からいずれも８世紀中頃～後半に比定されており、今回の調査では遺物が全く出土しなかったSS001においても同様の構築時期を可能性として示唆しておく。

表２　方形周溝状遺構計測値

（単位＝ｍ）

調査次数 地点名		遺構番号 遺構名	規模		軸方位	周溝		埋葬施設
			周溝外縁 検出面 推定値	方台部 検出面 推定値		上端幅 検出面 推定値	深さ 検出面 推定値	
第１次調査	第３地点 南西のトレンチ	１号方形周溝状遺構	6.0 × 5.0 以上	4.6 × 4.2 以上	N- 6° -W	0.6 ～ 0.8	記載なし	－
		２号方形周溝状遺構	5.1 × 4.7 以上	3.8 × 3.5	N- 11° -W	0.5 ～ 0.6	記載なし	－
	第６地点 北側の調査区	方形周溝状遺構	10.5 × 9.1 以上	8.2 × 7.3 以上	N- 14° -W	1.0 ～ 1.2	1.1 ～ 1.5	方台部 中央
第２次調査		004号遺構	6.8	5.1	N- 19° -W	0.3 ～ 0.8	0.05	未検出
第３次調査		SS001	5.2 6.3	(3.5) 1.8	N- 9° -W	0.8 ～ 1.0 2.25	0.15 0.4 ～ 0.5	未検出



第８図　南名山遺跡全測図

２．道路状遺構（第８・９図、図版８）

調査範囲の南北両端付近で、２条の道路状遺構（SD001・002）を検出した。調査範囲の制約上、精査できたのは極めて部分的な範囲にとどまり、両遺構ともその幅員を捕捉することができなかった。

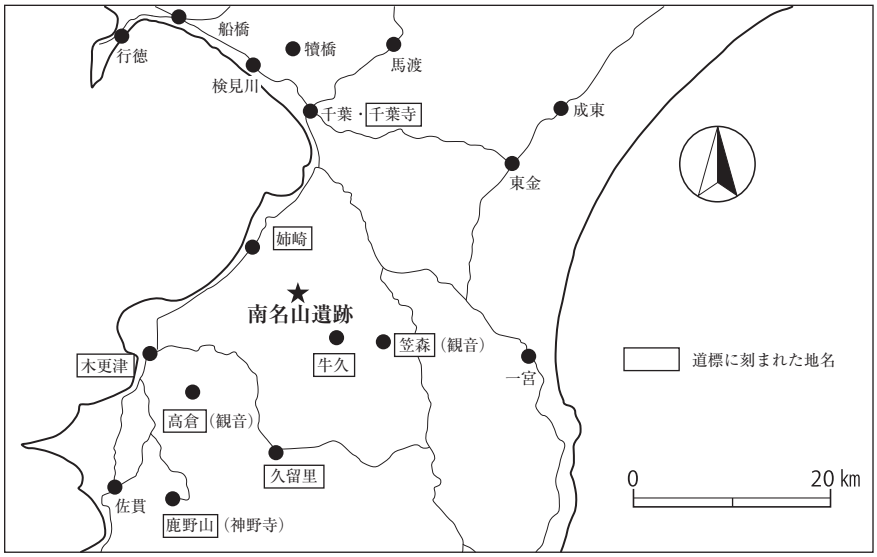
調査範囲北端で検出したSD001は、N -17° - W方向に約6.5 m分を精査した。立川ローム層のⅡｂ層を切って構築され、上端幅1.5 m以上、深さ0.9 m以上の掘込みと覆土上位に硬化面を持つものであることが判明した。北側は第１次調査の第４地点南端トレンチで検出された道路状遺構へ続き、調査区西側法面で観察できた約8.8 m分以南は、さらに現道下へと延びているものと思われる。

調査区南端で検出されたSD002は、N -37° - W方向に約3.0 m分を精査し、表土直下から0.6 m以上の掘込みと底面付近に硬化面を持つものであることが判明した。南北両側は調査範囲外に延び、南側については、第１次調査・第５地点の北側トレンチで検出された道路状遺構と平行して延びるものと思われる。

SD001・002を含め、本遺跡のこれまでの調査で検出された一連の道路状遺構は、中高根地先で鎌倉街道の下新田・立野ルートから分かれ、上高根北袖線に沿って、その起点である上高根十字路の交差点方向に延びている。しかし、そこから先が一体どこに通じていた道なのか、いくつものゴルフ場が隣接して占地する現状から探ることは難しい。

ただし、上高根十字路交差点付近に半ば埋もれていた供養塔[(2)]には、「東　うしく　かさもり」「北□さき（姉崎か）　ちは寺道」「西　木さら津　高くら道」「南　くる里　かのふ山」と四面に道標銘が刻まれており、その形状と「□□七午　九月」の紀年銘から、文化７（1810）年庚午９月の建立が比定できるものである。このことは、江戸時代中期後半の此地における建立者の空間認識を示すものであると同時に、当時、彼地に向かって既に延びていたであろう古道の存在を示唆するものと考えることができる。

また、第１次調査・第２地点で検出された道路状遺構の覆土中より、８世紀中頃に比定される土師器坏が出土したことから、その帰属時期を「古代まで遡る可能性がある」とする指摘もあるが、本遺跡の一連の道路状遺構の存在をどこまで遡行させられるかは今後の検討課題といえる。



第９図　道標に刻まれた地名

註

（1）第１次調査の報告書の第８図には、方形周溝状遺構・160分の１、道路状遺構・80分の１の縮尺で、同一挿図中にそれぞれの平面図が所収され、遺構規模等の数値はそれぞれの縮尺で計測されたものが報告されている。今回、この実測図を引用して整理作業を進めたところ、さまざまな場面で縮尺の不整合が生じた。検証の結果、方形周溝状遺構の縮尺が「160分の１」ではなく、道路状遺構と同様の「80分の１」と仮定すると不整合が解消することが判明した。従って、本報告書では方形周溝状遺構の縮尺を「80分の１」と読換え、再計測した数値で遺構規模等を比較した。

（2）「上高根十字路」の交差点付近に古い道標が所在することは、調査期間中に現場を見学に訪れた複数の地元住民の方からご教示頂いた。

写　真　図　版

遺跡周辺の航空写真

図版 2

調査前遠景（南から）

調査前近景（南東から）

調査前近景（北西から）

調査状況（上層確認調査）

調査状況（上層確認調査）

調査状況（遺構の検出）

調査状況（遺構の精査・SS001）

調査状況（セクションの実測・SS001）

調査状況（下層確認調査）

土層堆積状況（２A36 グリッド）

土層堆積状況（３B91 グリッド）

図版 4

SS001（南東から）

SS001（北西から）

SS001（北東から）

SD003（南西から）

SD003（東から）

SD003（南東から）

図版 6

SD001（南東から）

SD001（東から）

SD001 検出状況（東から）

SD002（北西から）

SD002 セクション（北西から）

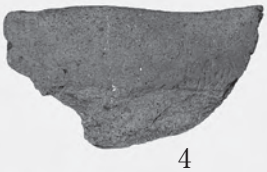
SD002 検出状況（北西から）

図版 8

1

2　SD-003-2 石英斑岩 HS

3



4

6

5

道標遠景（北西から）

道標近景（北西から）

東面

北面

西面

南面

報告書抄録

ふりがな	いちはらし　ななやまいせき
書名	市原市　南名山遺跡
副書名	県道上高根北袖線　県単交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第709集
編著者名	山田　貴久
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　TEL：043-424-4848
発行年月日	2013年3月5日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南名山遺跡（ななやまいせき）	千葉県市原市（ちばけんいちはらし）上高根（かみたかね）1607-105 ほか	12219	097	35度25分40秒	140度05分41秒	20121009～20121029	267㎡	道路改良工事
				世界測地系 WGS84				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南名山遺跡	包蔵地	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代 中～近世	方形周溝状遺構1基 溝状遺構1条 道路状遺構2条	縄文土器・石器 土師器	

要約	県道上高根北袖線の交通安全対策事業に伴い実施された調査である。狭小な調査区ながら、奈良・平安時代の方形周溝状遺構1基･溝状遺構1条､中～近世の道路状遺構2条が検出された。また、遺構には伴わないものの、縄文時代の土器・石器、古墳時代後期の土師器などの遺物が出土した。

千葉県教育振興財団調査報告第 709 集

市原市南名山遺跡

―県道上高根北袖線　県単交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―

平成 25 年 3 月 5 日発行

編　　集　　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文　化　財　セ　ン　タ　ー

発　　行　　千　葉　県　市　原　土　木　事　務　所
市原市八幡海岸通 1969

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印　　刷　　株式会社　エリート情報社［印刷出版局］
成田市東和田 415 － 10